

アリストテレス『トピカ』における問答法の推論とトポス

高橋 祥吾

1 目的

アリストテレスは『トピカ』において、問答法を考察している。問答法は、「提示されたあらゆる問題について、エンドクサに基づいて推論できる方法」(*Top. A 1. 100a21-23*)である。問答法は、論と帰納を含むが、『トピカ』においては、専ら推論が説明されている。そして、『トピカ』の主要部分というべき第二巻から第七巻にかけて、トポスと呼ばれるものが列挙されていることから、問答法の推論はトポスに基づいていると考えられる。また、『トピカ』第二巻から第七巻の中で挙げてあるトポスは、第一巻で説明されている述語様式に基づいて、各巻ごとに列挙されている。

しかしながらアリストテレスは、問答法の推論が具体的にどのようにトポスと関わるのかを明示してはいる。そのため、アリストテレスが問答法の推論としてどのようなものを想定していたのかは不明瞭である。

本稿では、『トピカ』における問答法の推論の論述とトポスの列挙から、問答法の推論をどのように理解できるか、そしてそれぞれのトポスに見いだされる特徴を明らかにしていく。

2 問答法の特徴

『トピカ』の冒頭において問答法は、次のように語られている。

[T1] この論考の目的は、それによって我々が〔相手によって〕提示された問題のすべてについてエンドクサに基づいて推論することができるであろう方法を発見することである。そして、我々自身が議論を維持しつつ、矛盾していることを何も述べることのない方法を見つけることである。(*Top. A 1. 100a18-21*)

アリストテレスは、このT1で、*διαλεκτική* (問答法) という言葉を使わずに¹、「方法」(*μέθοδος*)とだけ述べ、問答法についての説明を行っている。すなわち、1) エンドクサに基づいて (*ἐξ ἐνδόξων*) 推論すること (*συλλογίζεσθαι*)、2) 問答の相手によって提示された問題について推論を行うこと、3) 自分が構築する議論において、矛盾したことを述べないことである。本稿では、このうちの1) について考察を進めていく。

2.1 問答法の推論とエンドクサ

さて、1) に関してアリストテレスは、第一巻第十二章で、問答法の諸議論 (*λογὸς διαλεκτικοί*) の種類に、推論 (*συλλογισμός*) と帰納 (*ἐπαγωγή*) の二種類があると述べている (*Top. A 12. 105a10-12*)。アリストテレスは、推論することを *συλλογίζεσθαι* と表現する一方で、『分析論後書』において、帰納することは、*ἐπαχθῆναι* と表現したり (*APst. 71a24, 81b5*)、帰納する人を *ἐπάγων* と表現したりしている (*APst. 91b15, 91b35, 92a37*)。このことから、アリストテレスが問答法について専ら念頭に置いているのは推論であり、このことはT1のすぐ後で、アリストテレスが問答法の議論 (*διαλεκτικοί συλλογισμός*) を論証 (*ἀπόδειξις*) と区別する説明を行っていることも、その証拠であるように思われる。

¹ アリストテレス自身は『トピカ』の中で *διαλεκτική* という表現をほとんど用いていない。 *διαλεκτική* という表現が確認できる箇所は 108a34 と 112b11 である。

さらに1)に関して、問答法はエンドクサ (ἐνδοξά) に基づいていると言われている。エンドクサに基づいていることは、問答法の推論と論証の区別する重要な特徴である。アリストテレスは、論証の前提は「真であり第一のものども」であり、それに対して、問答法の推論の前提はエンドクサであると説明している (*Top.* A 1. 100a27–30)。論証の前提は、推論を通じてではなくて、前提それ自体を通じて真であることに確信を持てるものである (*Top.* A 1. 100a30–b19)。それに対して、エンドクサは次のように説明されている。

[T2] エンドクサは、すべての人に、あるいは大多数の人にそうであると思われているもの、あるいは知者たちにそうであると思われているものである。しかも、知者たちのすべてに、あるいは大多数の知者に、あるいはもっともよく知られていて評判の高い知者にそうであると思われているものである。 (*Top.* A 1. 100b21–23)

T2 から、エンドクサには二つの種類があるように思われる。それは知者にそう思われているものと、知者以外の人、つまり一般に人々にそうであると思われているものである。

2.2 一般の人々のエンドクサ

すべての、あるいは大多数の人々にそう思われているものとしてのエンドクサは、『弁論術』において論じられているように思われる。『弁論術』第一巻第一章では、弁論術の推論（論証）であるエンテューメーマについて語られている。弁論術は問答法と対応関係にあり、エンテューメーマは問答法の推論に対応している (*Rhet.* A 1. 1354a1–3; 1356a35–b5)。問答法がエンドクサに基づいているのであれば、対応する弁論術もエンドクサに基づいていると考えられる。そして、大衆を説得するための技術である弁論術は、大衆に受け入れられている見解を用いて説得すると考えられる。『弁論術』においてアリストテレスは、論証によって行うのは、説得ではなく教授であり、弁論術によって説得的立論 (πίστις) を構築することで説得する必要があると考えている (*Rhet.* A 1. 1355a24–29)。そしてアリストテレスは、『トピカ』において、問答法が大衆との討論に役立つと述べている。そのとき、彼は問答法によって人々の考えを変えさせることができると考えている。

[T3] 討論のために役に立つというのは、多くの人々の見解を枚挙した上で、〔その人たちとは〕別の人々の考え方に基づくのではなくて、その人々自身の考え方に基づいて、適切に語っていないと我々に思われることは考えを変えさせながら、彼らと話しあうことができるだろうからである。 (*Top.* A 2. 101a30–34)

T3 で、アリストテレスは「その人々自身の考え方に基づいて (ἐκ τῶν οἰκείων δογμάτων)」と述べているが、ここで述べられている δόγματα は、多くの人々自身のエンドクサでもありと考えられる。このように、多くの人々にそう思われているものとしてのエンドクサは、人々を説得と関係し、弁論術において用いられるものだと考えられる。

2.3 知者のエンドクサ

それに対して、知者たちにとってそう思われているものとしてのエンドクサは、問答法が、学知の原理の獲得、あるいは哲学に即した諸学知に対して (πρὸς τὰς κατὰ φιλοσοφίαν ἐπιστήμας) 有用であることに関係するよう思われる。

学知の原理を獲得することについて、アリストテレスは、学知の原理は第一のもの、つまり論証の前提であるため、その原理を論証では手にすることはできないと考えている。そのため、学知の原理をエンドクサに基づいて手にしなければならないと考えている (*Top.* A 2. 101a36–b4)

そしてアリストテレスは、哲学に即した諸学知に関して、問答法によって、対立する二つの立場に対して生じる難問をくぐり抜ける (διαπορῆσαι) ことができるなら、真偽を見分けることが容易になると言う (Top. A 2. 101a34–36).

このような、対立する双方の立場のそれぞれに難問 (アポリア) が存在する場合の典型例としては、『形而上学』第三卷 (B 卷) における難問の列挙が考えられる。アリストテレスは、その後の第四卷 (Γ 卷) 以降で、その難問の解決を試みていると考えるならば、『形而上学』の論述それ自体が一種の問答法的手続きということになる。

そして、知者のエンドクサという点に関しては、『形而上学』第一卷の哲学的記述とも言われる部分が、まさに知者のエンドクサであると考えられる。また、『魂について』第一卷における先行する哲学者たちの見解や、『ニコマコス倫理学』第一卷における幸福についてのソロンの見解 (EN A 10. 1100a10–11) なども知者のエンドクサであると考えられる。『ニコマコス倫理学』第一卷では、幸福について、知者たちだけでなく、大衆たちの考えにも基づいている (EN A 10. 1095b14–16)。この点で、アリストテレスは、学の種類に応じて、知者たちのエンドクサだけに基づいたり、大衆のエンドクサも参照したりしている可能性はあるだろう。

2.4 エンドクサと問答法的前提と問題

さらに、このようなエンドクサは、そのまま問答法的前提として用いられるわけではないことに注意すべきである。問答法的な前提 (πρότασις) と問題 (πρόβλημα) は、明確に問いの形式が与えられている。たとえば、「二足歩行の動物」は「人間」の定義であるか、否か」という形式の問いは、問答法的な問題であり、「二足歩行の動物」は「人間」の定義であるか」という形式の問いは、問答法的前提である (Top. A 4. 101b29–33)。エンドクサは、このような問いの形式に当てはめられて、問答法の推論の前提として機能しうるのである。この問答法的前提と問題のうち、問答法的前提の方は、明確にエンドクサに基づいているとアリストテレスは述べている。

[T4] そして、問答法的前提は、あらゆる人に、あるいはもつとも多くの人々に、あるいは知者たちに、すなわち、彼等のすべてに、あるいはもつとも多くに、あるいはもつとも有名な者たちに、矛盾を含むものでない限りで、エンドクサを問うたものである。というのは、多くの人々の見解に反対でないならば、知者達に思われているものを人は立てるからである。そして、問答法的諸前提は、エンドクサに似たものでもあり、エンドクサであると思われるものと反対のものでもあり、対立する言明に従って提言されるものでもあり、見い出されている技術知に則している見解であるものでもある。 (Top. A 10. 104a8–15)

この問答法的前提は、「はい」か「いいえ」で答えられるものでなければならない。そのため、問いの形式が *ἄρα γε* …… という形になっていることが求められている²。

問いを「はい」か「いいえ」で答えられるようにすることは、その問いが矛盾対立する命題に基づき、その矛盾対立する命題のどちらを選ぶかを問うものであるということである。質問者によって矛盾対立する命題の片方で形成された問いが、応答者によって否定された場合、必然的に否定された命題に矛盾対立するもう片方の命題が真として受け入れられるということになる。逆に、応答者によって肯定された場合は、その問いが示す命題をそのまま真として受け入れることになる。「二足歩行の動物」は「人間」の定義であるか」という問いに「はい」と答えるならば、人間の定義が「二足歩行の動物」であることを真として受け入れたことになり、「いいえ」と答え

²ただし、Hadgopoulos によって例外が指摘されている (Hadgopoulos 1976, 268)。Top. 105b23–25 では、πρότασις の例として、πρόβλημα の表現形式が用いられている。しかし例外はこれだけであり、Slomkowski が言うように (Slomkowski 1997, 21–22)、この例外をあまり強調しすぎるべきではないと思われる。

るならば、偽として拒否したことになる。「はい」と「いいえ」で答えられる問いであることは、問答法的前提によって問われている内容についての真偽を決めるために必要な条件となっている。

その一方で、問答法の問題は、難問（アポリア）と関係するものであると考えられる。アリストテレスは、次のように述べている。

[T5] それらの事柄についての推論が反対であるような、その事柄も〔問答法的な〕問題である。（というのは、何かがそうであるのか、ないのかという難問を持つのは、両方について説得力のある議論が存在する故にであるから。また、その事柄についての議論を、その事柄〔の範囲〕が大きいので、我々が持つことができないような、その事柄も〔問答法的な〕問題である。それは我々が、「何ゆえに」を与えることが困難であると思つてのことである。例えば、宇宙は永遠であるか、否かという場合のように。というのも、人はそういう類いのものどもも、探究しうらさうからである。（*Top. A 11. 104b12-17*）

このように問答法の問題の特徴は、何らかの困難を持っているということである。この点が、『形而上学』の難問（アポリア）と関連するように思われる。『形而上学』第一巻におけるエンドクサは、そのまま用いられているのではなく、第三巻において難問としてその形を変えていると考えられる³。『形而上学』第三巻で挙げられるアポリアは、たとえば「諸原因のすべての種類を考察することは、ひとつの学知に属することなのか、あるいはひとつより多くの学知に属することなのか」（*Metaph. B 2. 996a18-20*）というものである。πότερον…… ἢのような形式で問いが立てられているのは、問答法の問題と『形而上学』第三巻のこのアポリアに共通する部分である。したがって、『形而上学』第三巻のアポリアの列挙は、問答法的な問題を立てる作業として捉え直すことが可能である。

以上のような問答法的前提と問題の役割を、Smithは、使用法の違う命題 (proposition) であり、問答法的前提は問いの形で応答者に提示される命題であり、問答法の問題は、質問者と応答者の間の見解の不一致の主題となっている命題のことであるとまとめる (Smith 1997, 56-7)。

3 問答法的推論のトポス

このような問答法的前提と問題だけでは、問答法の推論は成立しない。問答法の推論には、トポスと呼ばれるものが必要とされる。しかし、アリストテレスはトポスについての定義や説明を与えていない。『トピカ』第二巻から第七巻にかけて、トポスを列挙しているだけである。『トピカ』においてアリストテレスは、トポスとは何かは、自明のものとして前提している。

3.1 弁論術のトポスの規定

ところで、『弁論術』の中でアリストテレスは、トポスの定義らしきものを述べている。『弁論術』第二巻第二十六章でアリストテレスは次のように述べている。

[T6] というのも、ストイケイオン (στοιχείον: 要素) とトポスを同じものであると、私は言う。なぜなら、ストイケイオンとトポスは、多くのエンテューメーマがそれへと帰着するところのものだからである。（*Rhet. B 26. 1403a17-18*）

この『弁論術』におけるトポスとストイケイオンが同じであるという説明は、弁論術に対応する問答法のトポスにも通用するものであるようにも思われる⁴。しかしながら、Brunschwigが指摘す

³Ross 1924, 222; Crubellier, M. and A. Laks 2009b, 3-11.

⁴たとえば、池田 (2007, 406-417) も、『弁論術』におけるトポスとストイケイオンの関係から、トポスについての考察を行っている。

るように⁵、『弁論術』と『トピカ』のトポスが、全く同じものであるのかは注意を必要とする。というのは、『トピカ』のトポスは、推論を構築するために必要な規則のようなものであると思われるからである⁶。それに対して、『弁論術』のトポスは、まず「共通トポス」と「固有トポス」⁷に区別される。そして、固有トポスは説得の目的に対して有用な命題であり、明らかに規則のようなものではない。『トピカ』におけるトポスの特徴はどのようなものであるのか、さらに考察が必要である。

3.2 トポスの解釈：規則 (règel) と法則 (loi)

トポスに関する有力な解釈に、de Pater によるものがある。その解釈を観るために、まずトポスの具体例を一つ挙げることにする⁸。

[T7] さらに、(a) それに対して何か反対のものがある、その付帯性が指定されている場合に、当の付帯性を受け入れうるものが、その反対のものをも受け入れうるかどうかを考察するべきである (σχοπεῖν)。 (b) なぜなら (γὰρ)、同じものは、反対のものどもを受け入れうるからである。たとえば、もし憎しみが怒りに付き従うと、相手が述べたときは、憎しみが魂の気概的部分の中にあることになるだろう。というもこの〔気概的〕部分に怒りはあるからである。ゆえに、反対のものも気概的部分の中にあるかどうか考察するべきである。というも、もし〔憎しみに反対の〕友愛が気概的部分の中になく、欲望的部分の中にあるならば、怒りに憎しみは付き従うのではないだろうから。 (Top. B 7. 113a33–b3)

このトポスの (a) の部分「それに対して何か反対のものがある、その付帯性が指定されている場合に、当の付帯性を受け入れうるものが、その反対のものをも受け入れうるかどうかを考察するべきである (σχοπεῖν)」が、de Pater が規則 (règel) と呼ぶものである (de Pater 1968, 165)。そして (b) 「なぜなら (γὰρ)、同じものは、反対のものどもを受け入れうるからである」の部分 が法則 (loi) と呼ぶものである。この法則部分は理由文になっている点 が特徴である。規則は法則に従っているものであり、法則によって規則が成り立っている。実際の間答において従うのは規則の方である。しかし、その規則は、法則に基づいて作られているのである。

3.3 アレクサンドロスによるトポスの説明

さて、このようなトポスの規則 (règel) に従って、どのように問答法の推論が成立するのか。Smith は、アレクサンドロスが紹介するテオプラストスのトポス定義を挙げる (Smith 1997, xxv)⁹。アレクサンドロスが紹介するテオプラストスのトポスの定義は次のものである。

[T8] トポスは、ある種の出発点 (ἀρχή) であり、あるいはストイケイオンである。このトポスによって、個々のものについての出発点を我々は取得するのである。そのあるものは輪郭 (περιγραφή) によって定められているものであり、個々のものにおいて定まっていないものである。 (Alexander in Top. 126. 14–16)

⁵Brunschwig 1996, 41–42.

⁶Brunschwig 1996, 41; Brunschwig 1967, XL.

⁷この「固有トポス」と「共通トポス」という表現は、浅野 (1996, 79–81) に依拠した。このトポスの区別は、Grimaldi (1980, 349–350) も行っている。また、この「固有」と「共通」の区別は、『分析論後書』第一巻第十章に見られる、論証の原理の説明に表れる「固有」と「共通」の区別と対応しているように思われる。

⁸このトポスは、de Pater が挙げているトポスである (de Pater 1968, 164–5)。

⁹以下、アレクサンドロスによるトポスの説明については、大部分、Smith (1997, xxv–xxvi) に基づいている。

このテオプラストスのトポスの定義の具体例として、アレクサンドロスが次のようなものを挙げる。

[T9] たとえば、トポスは「もし反対のもの(A)が反対のもの(B)に帰属するならば、[(B)の]反対のもの(B')に[(A)の]反対のもの(A')は帰属する」というものである。というのも、このトポスは文、すなわち命題であり、輪郭によって普遍的に定められている(なぜなら、反対のものどもについて普遍的に述べられていることは明らかだからである)。しかしながら、もしこの反対のものどもについて、あるいはその反対のものどもについて、述べられているのならば、それにおいてまだ定められていないのである。というよりもむしろ、このトポスによって促されて、反対のものどもの個々のものについて、攻撃することができるのである。というのも、もし善について有益であるかどうか探求する場合には、我々は先に置かれているトポスによって促され、先に置かれた問題に〔トポスを〕付け加えて、「もし悪が有害であるならば、善は有益である」という前提を手に入れるだろうからである。(Alexander in Top. 126. 16–23)

アレクサンドロスが説明するトポスは「もし反対のもの(A)が反対のもの(B)に帰属するならば、[(B)の]反対のもの(B')に[(A)の]反対のもの(A')は帰属する」というものであるが、Smithが言うように、少々わかりにくい表現をしている(Smith 1997, xxv)。アレクサンドロスが挙げるトポスが意図するところは、あるもの(A)が別のあるもの(B)に帰属するとき、そのAに反対のもの(A')も、Bに反対のもの(B')に帰属するということである。アレクサンドロスは、AもA'も、同じく「反対のもの(ἐναντίον)」と言っている、AとA'の両者は互いに「反対のもの」同士だからである。

そしてこのトポスは、「輪郭 περιγραφή」によって定められているものであるという。περιγραφήというのは、このトポスが具体的な内容を欠いていて、骨子部分だけが書かれていることであろう。個別の内容を欠いているため、普遍的であり、様々な個別的な事柄に適用することが可能になっている。たとえば、善が有益かどうかを議論する場合だけでなく、快樂について、善であるかを議論する場合(Alexander in Top. 126. 28–30)など、個別のことに、このようなトポスを適用することが可能である。

T9にあるように、「善が有益かどうか」という問答法の問題を議論するためにこのトポスを用いるならば、「善」と反対のものである「悪」と、「有益である」に反対のものである「有害である」を持ち出して、トポスを適用し、「もし悪が有害であるならば、善は有益になる」という前提を手に入れることになる。

そうして、「善が有益かどうか」という問答法の問題において、「善は有益である」という結論を得たい人は、トポスを適用して得た「もし悪が有害であるならば、善は有益である」という前提に加えて、「悪は有害である」という前提を、問答において、相手に承認してもらえば、結論として「善は有益である」を得ることができるのである。このような形で、トポスは問答法の推論を作りだすために用いることができる。

以上のように、トポスは、推論を構成するための前提の一つを提供してくれるものとなっている。トポスは、前提そのものではないし、またトポスだけで推論が構成されるわけでも、推論の形式を提供しているわけではない。

3.4 アリストテレスのトポスの例

さて、以上のアレクサンドロスの説明に対応するアリストテレスのトポスは、Smith(1997, XXV)も言うように、113b27–28のトポスであろう。そのトポスは「反対対立(ἐναντίον)」に関するものであり、次のようになっている。

[T10] そして、(a) 反対のものどもについて、反対のものに反対のものが付き従うの

かどうか、〔随伴関係が〕同じ方向であれ、逆の方向であれ、破棄する人にとっても、構築する人にとっても、考察するべきである（σχοπεῖν）。このようなものもまた、有益であるかぎり、帰納によって把握すべきである。ゆえに、一方で随伴関係が同じ方向にあるときは、たとえば、勇氣と臆病に随伴する場合である。（b）なぜなら、一方のもの〔勇氣〕に徳が随伴し、他方もの〔臆病〕に悪徳が随伴するからであり、そして、前者には、望ましいものが随伴し、後者には避けられるべきものが随伴する。ゆえに、これらのものの随伴関係は同じ方向である。なぜなら、望ましいものは、避けられるべきものに反対だからである。そして、他のものについても同様である。（*Top.* B 8. 113b27–34）

このトポスでは、先の de Pater らの解釈に基づくならば、(a)「反対のものどもについて、反対のものに反対のものが付き従うのかどうか、〔随伴関係が〕同じ方向であれ、逆の方向であれ、破棄する人にとっても、構築する人にとっても、考察するべきである」が規則であり、(b)「なぜなら、一方のもの〔勇氣〕に徳が随伴し、他方もの〔臆病〕に悪徳が随伴するからであり、そして、前者には、望ましいものが随伴し、後者には避けられるべきものが随伴する」という部分が法則となるはずである。

しかし、(a)の規則部分はともかく、(b)の部分が法則であるのか判断が難しい。池田(2007, 412)が指摘するように、法則の部分は規則に含意されているものとして省略されていると考えることもできるかもしれない。しかし、この箇所では、帰納によって規則を把握すべきと、アリストテレスは述べていることから、(b)の部分は個別の具体例でありながら、帰納によって、(a)の規則部分を把握するための、法則の代わりとなっていると考えられる（Primavesi 1996, 225）。

(b)の部分にあるように、このトポスによって、「もし勇氣が徳であるならば、臆病は悪徳である」という命題を手に入れることができるだろう。さらに、「勇氣が望ましいものであるならば、臆病は避けられるべきもの」という命題も手に入れることができる。勇氣が徳であること、勇氣が望ましいものであることは、エンドクサとして問答の相手に受け入れられることであろうから、「臆病は悪徳である」という結論や「臆病は避けられるべきものである」という結論を導くことができるだろう。ただし、それは、臆病が勇氣に反対であるかぎりで成立するのであるから（Alexander in *Top.* 193. 15）、臆病と勇氣が反対の関係であることも、問答の相手から同意を得ていなければならないだろう。

さらに、別のトポスも挙げることにする。このトポスは、「矛盾対立（ἀντίφασις）」に関するトポスである。

[T11] そして、対立には四種類あるので、(a)まず矛盾対立については、〔命題を〕破棄する人（ἀναφροῦντα）も、確立する人（κατασκευάζοντα）も、随伴関係を逆にして考察すべきである（σχοπεῖν）。しかしこのことは、帰納によって把握すべきである。たとえば、人間が動物であるならば、動物でないものは人間ではない、というように。そして、他の場合も同様である。というのも、この場合、随伴関係は逆になっているからである。（b）なぜなら（γάρ），人間には、動物は付き従うが、しかし人間でないものに動物でないものは付き従うことはなく、むしろ逆に、動物でないものに、人間でないものが付き従うからである。ゆえに、すべてについて、このようなことを要求すべきである。たとえば、美しいものは快いならば、快くないものも美しくないというように。そして、後者が成り立たないならば、前者も成り立たない。そして同様に、快くないものが美しくないならば、美しいものは快い。ゆえに、矛盾対立に即した随伴関係は、逆にすれば、破棄と確立の両方へと転換することは明らかである。（*Top.* B 8. 113b10–26）

アリストテレスは、「対立（ἀντικειμένον）」に四つの種類があると述べている。この四種類とは、「矛盾対立（ἀντίφασις）」、「反対対立（ἐναντίον）」、「所有と欠如（ἔξις καὶ στερήσις）」、「関係（πρός τι）」と

考えられる¹⁰。T11では、その四つのうちの矛盾対立について論じているトポスである。このトポスもまた、規則と法則というトポス解釈において、法則の部分が曖昧である。しかし、T10のトポスと同じように帰納によって、法則の代わりとなっていると考えられる。このトポスは、対偶関係に基づいたものと理解することが可能であるが、アリストテレス自身は、この関係を帰納によって把握する必要があると考えている。

このトポスはどのように用いることができるだろうか。アリストテレスが挙げている、「人間が動物であるならば、動物でないものは人間ではない」という例は、あまりにも単純であり、人間が動物であることも、動物でないものが人間でないことも、議論が生じるような類いのものではない。このようなものは、問答法の問題にならないと考えられるからである。アリストテレスは次のように言っている。

[T12] だからはじめに、問答法的前提とは何か、そして問答法の問題とは何かを規定することにしよう。というのは、あらゆる前提を、問答法的なものだと見なすべきでなく、すべての問題も問答法的なものとは見なすべきではないからである。というのは、いかなる人も、誰にもそう思われたいことを考慮して、前提を与えたりしないし、あらゆる人に、あるいは最も多くのひとたちに明白なものを問題にしたりもしないからである。なぜなら、一方の問題にはアポリア〔困難〕はないし、他方の前提を誰も立てはしないだろうから。(Top. A 10. 104a3–8)

誰にとっても自明で問題とならない、意見の対立が存在しないものは、問答法の問題にも前提にもならない。「人間が動物であるか、否か」という問いは、人々に自明なものであり、意見の対立は起こりがたい。そのため、この問いは問答法の問題として立てられるとは思われたいのである。

そのためアレクサンドロスは、このトポスを用いた例として、次のようなものを挙げている。

[T13] このことゆえに、もし生成するものは始まり(ἀρχή)を持つならば、始まりを持たないものは生成しないのであり、メリッソスが考えていたように、生成しないものは始まりを持たない、とはならないのである。(Alexander in Top. 191. 30–192. 2)

ここでアレクサンドロスは、メリッソスの見解を否定するためにトポスを用いていると言える。トポスを適用して得られる前提は、「生成するものは始まりを持つならば、始まりを持たないものは生成しない」であると考えられ、そして、「生成するものは始まりを持つ」という見解を、問答の相手から同意してもらえらば、帰結としてメリッソスの見解は出てこないことになる。単純に「AがBであるならば、BでないものはAでない」という対偶関係だけでなく、裏の関係「AでないものはBでない」と結びつけることで、有用な議論を構成可能としているのである。

以上のようなトポスの例から、アリストテレスが考える問答法の推論は、一種の条件的推論であると考えられる¹¹。トポスの適用によって条件命題($P \Rightarrow Q$)を構成し、エンドクサに基づいた問答法的前提(P)と結びつけて結論(Q)を導き出している。記号で表記するならば、次のような推論を構成している。

$P \Rightarrow Q$

P

┆Q

このように、問答法の推論を一種の条件的推論として形式的に解釈することは可能であるだろう。

¹⁰ 『カテゴリー』第十章では、「肯定と否定(κατάφασις καὶ ἀπόφασις)」が、「矛盾対立」の代わりに挙げられているが、アリストテレスは同じものとして扱っているように思われる。

¹¹ たとえば、Slomkowski(1997, 95ff.)もこの立場である。

4 『トピカ』におけるトポスの分類

以上から、トポスを条件的推論の前提となる条件命題を作り出すための規則として解釈することができるように思われる。このようなトポス理解は、『弁論術』におけるトポスの説明と整合するだろうか。

もしトポスがストイケイオンであるという『弁論術』の説明を、トポスが推論の構成要素であり、推論の前提となるという意味で理解するならば、それは間違いということになるだろう。問答法的前提や問題と、トポスは基本的に異なる。したがって、トポスは前提という意味でストイケイオン（構成要素）ではない。そうではなく、問答法の推論を構成するための議論の枠組み・骨子であると理解するべきであろう。

しかし、この理解は『弁論術』の共通トポスや固有トポスと整合するだろうか。もし整合しないのであれば、『トピカ』におけるトポス概念と『弁論術』のトポス概念は異なることになるだろう。

4.1 『弁論術』のトポス

『弁論術』において、アリストテレスは共通トポスと固有トポスの関係を次のように述べている。

[T14] というのも、私が言っているのは、問答法の推論と弁論術の推論は、我々がそれらについてトポスを論じるころのものなのだということである。

そして、このトポスは、正しいものにも、自然のことにも、政治的なことにも、種において異なる多くのことについても、共通のトポスである。例えば「より多く」や「より少なく」というトポスである。正しいものや、自然のことや、政治のことや、その他何であれこれらについて、このトポスに基づいて同じように推論したり、エンテューメーマを述べることができるだろうからである。

その一方で、「固有のもの」とは、個々の種と類をめぐる前提命題に基づいている限りのものである。たとえば、自然のことについて前提命題があり、それらに基づいては、倫理的なことについてのエンテューメーマも推論も成立しない。そしてこれら〔倫理的なこと〕についての他の前提命題は、それらに基づいては自然のことについての〔エンテューメーマも推論も〕成立しない。そして、このことはすべてのことについて同様である。

そして、かのもの〔共通のトポス〕はいかなる類についての精通者も生み出さないだろう。なぜなら、かのもの〔共通トポス〕は、いかなる主題とも関係がないからである。その一方で、これら固有のものは、人がよりよく諸命題を選べば選ぶほど、その人は問答法や弁論術とは別の学知を生み出していることに気づかずにいるだろう。というのも、諸原理に行き着いたときには、それは問答法でも弁論術でもなくて、その人がその原理を手に行き着いているその学知ということになるからである。(Rhet. A 2. 1358a10–26)

アリストテレスが、固有トポスとして考えているものは、推論の前提となる命題のことであるように見える。自然に関する前提、政治に関する前提など、それぞれの学に応じた前提のことを、ここでは固有なものとして扱っているように思われる。そしてこの固有のトポスという命題をよりよく選び出すとき、それは弁論術でも問答法でもなく、学知と論証に関係することになる。

その一方で、共通トポスは、「より多く」や「より少なく」というトポスが例として述べられている。このトポスについての詳細は、『弁論術』第二巻第二十三章で述べられている。

[T15] 他のトポスは、「より多く」と「より少なく」に基づくものである。たとえば、「もし神々さえもすべてのことを知ってはいないのなら、まして人間たちがすべてのこ

とを知るなどほとんどないことだろう」のように、というのも、これは「もしより多く帰属するであろうものに帰属しないのであるならば、より少なく帰属するであろうものものにも帰属しないということは明らかである」ということだからである。他方で、「父親でさえも打つ人は、隣人たちを打つ」ということは、「もしより少なく帰属するものが、帰属しているならば、より多く帰属するものもまた帰属している」というものに基づいているのである。なぜなら、人々が、隣人たちを打つより父親を打つ方がより少なく起こるだろうからである。(Rhet. B 23. 1397b12-17)

この共通トポスは、「より多く」と「より少なく」に基づいているものであるが、議論を構成するために依拠しているものは、「もしより多く帰属するであろうものに帰属しないのであるならば、より少なく帰属するであろうものものにも帰属しないということは明らかである」というものと、「もしより少なく帰属するものが、帰属しているならば、より多く帰属するものもまた帰属している」というものである。この二つは、『トピカ』のトポスの解釈にあった、規則や法則と同じ役割をしていると言えるだろう。したがって、共通トポスは『トピカ』で挙げられているトポスに近いものと言える。

4.2 『トピカ』の共通トポス

さて、これに対して『トピカ』においても、共通トポスと考えられそうなものが存在し、アリストテレスはそのようなトポスについて『トピカ』第七卷第三章で述べている。この第七卷は定義項に関するトポスについて論じている巻である。

[T16] そして、今述べられたことや、同列語に基づくもの、語尾変化に基づくものは、トポスの中で最も利便性の高いもの(ἐπιχειρότατοι)でさえある。ゆえにまた、特にこれらを支配し、準備して持っていなければならない。というのも、もっとも多くの事柄に対してもっとも有用であるからである。(Top. H 4. 154a13-15)

この「今述べられたこと」というのは、直前の『トピカ』第七卷第三章で論じられていたことであると考えられている。すなわち、対立関係に基づくトポス、「より多く」と「同程度」に基づくトポスである¹²。

対立関係に基づくトポス、「より多く」と「同程度」に基づくトポス、そして同列語と語尾変化に基づくトポスは、最も利便性の高い(ἐπιχειρότατοι)トポスであるとされ、これらのトポスに習熟し、利用できるよくなっているべきであると、アリストテレスは述べる。それは、もっとも多くの事柄に対して有効であるからだと言われる。これらのトポスは、『トピカ』中で、かたちを変えて繰り返し列挙されているものなのである。このように繰り返し、様々な状況で利用できる点が、もっとも多くの事柄に対して有効であるという意味であろう。

『トピカ』におけるトポスは、命題の述語が表す付帯性・類・固有性・定義項(以下、この四つを「述語様式」と記す)のそれぞれについて分類され、各巻ごとに列挙されている。『トピカ』という著作での、トポスの分類基準は、この述語様式の分類に依拠している。『弁論術』の共通トポスと固有のトポスという分類の基準ではない。

しかしながら、先の引用にある「最も利便性の高いトポス」は、述語様式の分類に基づいて分けられた『トピカ』の各巻に、繰り返し現れている。たとえば、『トピカ』第四卷は類に関するトポスが列挙されているが、第三章では、類に関係する「反対のもの」についてのトポスが挙げられている(123a20-26; 123b1-124a14)。第四章では、「同程度」のトポス(124a15-34)が挙げられて

¹²池田(2007, 307 註(1))は、「より多く」と「同程度」のトポスだけを指摘しているが、山口(2014, 291 註(1))と同様に、対立関係のトポスも含まれると考える。

いる。さらに、語尾変化のトポスも挙げられている(125a5-13)。「より多く」と「より少なく」のトポスは、第六章で挙げられている(127b18-25)。

付帯性に関しては『トピカ』第二巻でトポスが列挙されているが、すでに挙げたT10とT11で、対立関係のトポスが挙げられていた。また同列語と語尾変化に関するトポスが第九章で挙げられている(114a26-b5)。第十章では、「同程度」のトポス(114b25-36)と「より多く」と「より少なく」のトポスが挙げられている(114b37-115a14)。

『トピカ』第五巻は固有性に関するトポスが列挙されているが、こども事情は同様である。

このように、「最も利便性の高いトポス」は、それぞれの述語様式に基づいた諸トポスに共通して見いだすことができるものである。このトポスは、『弁論術』の共通トポスと同種のものであるように思われる。実際に、「より多く」と「より少なく」のトポスは、『弁論術』において共通トポスとして扱われているのである。

しかし、『弁論術』の固有のトポスに対応するトポスを、『トピカ』の中に見いだすことは困難である。『トピカ』の「最も利便性の高いトポス」に当てはまらないトポスは、多くの場合、述語様式の定義に基づいたものである。たとえば、類についてのトポスには、類の定義や付帯性の定義に基づいたトポスがある。それは次のようなものである。

[T17] 次に、「何であるか」において述語づけられておらず、付帯性として述語づけられているかどうかは目を向けなければならない。ちょうど、白が雪の類であると措定したり、あるいは「自分自身によって動かされるもの」が魂の類であると措定したりするように。というのも、雪は、まさに白いものに他ならないわけでもない、まさにそのゆえに白は雪の類ではないからであり、魂も、まさに動かされるものに他ならないわけではなく、そして魂自身によって動かされることはたまたま起こったのである〔ので、「動かされるもの」は魂の類ではない〕。ちょうど、動物に、「歩くこと」や「歩くものであること」がしばしば帰属するように。(Top. Γ 1. 120b21-26)

[T18] そして、とりわけ付帯性の定義について、〔問答の相手によって〕述べられた類が〔付帯性の定義に〕適合するか、目を向けるべきである。たとえば、いま先程語られたものどものように。というのも、何かを動かすことは、自分自身を動かすことも動かさないこともあり得るし、そして同様に、白くあることもないこともありえるからである。したがって、それらのどちらも類ではなく、付帯性である。なぜなら、我々は、付帯性とは何かに帰属することもしないこともあり得るものと言っていたからである。(Top. Γ 1. 120b30-35)

これらのトポスは、de Paterの言う法則(loi)として、述語様式の定義が想定されているように思われる。T18では、付帯性の定義「付帯性とは何かに帰属することもしないこともあり得るもの」が法則として与えられ、この定義に適合するかどうかを考察すべしという規則が提示されている。T17では、類の定義にある「何であるか」において述語づけられている」に基づいて、この定義に適合しているかどうかを考察すべしという規則が提示されている。

これらのトポスは、命題の述語が表すものが類かどうかを判別するという目的に固有であると、言うことは可能であるかもしれない。しかし、このときの「固有である」という意味は、『弁論術』の固有トポスにおける「固有」とは異なるものであろう。これらの述語様式の定義に基づいたトポスは、明らかに前提命題そのものではないからである。

5 結論

以上から、『トピカ』におけるトポスの推論は、トポスによって作られた条件命題を含む仮言的な推論であること、トポスには、『トピカ』においても『弁論術』においても、共通トポスと呼べ

るようなトポスが見いだせることが明らかとなった。しかし、共通トポスのより詳細な内容の検討は、不十分なままであり、『弁論術』の固有トポスのような、『トピカ』に見いだしがたいトポスの問題についてもそのままになっている。『トピカ』と『弁論術』のトポス論の相違は、アリストテレスが考えていたトポスの推論が、時間を経て、変化したからなのか、あるいは問答法と弁論術の方法としての違いに基づくものなのか、明らかにすべき重要な点である。この点については、また稿を改めて論じることにはしたい。

References

- Brunschwig, J. 1967. *Aristote: Topiques, tome I : Livres I-IV*, Paris: Les Belles Lettres.
- Brunschwig, J. 1996. "Aristotle's Rhetoric as a "Counterpart" to Dialectic." In A. O. Rorty (ed.) *Essays on Aristotle's Rhetoric*, 34–55. Berkeley: University of California Press.
- Crubellier, M. and A. Laks (eds.) 2009a. *Aristotle: Metaphysics Beta*, Symposium Aristotelicum, Oxford: University Press.
- Crubellier, M. and A. Laks 2009b. "Introduction," in M. Crubellier and A. Laks (eds.) *Aristotle: Metaphysics Beta*, Oxford: University Press: 1–23.
- Grimaldi, W. M. A. 1980. *Aristotle, Rhetoric I: A Commentary*, 1st ed. New York: Fordham University Press.
- Hadgopoulos, D. J. 1976. "Protasis and Problema in the "Topics"," *Phronesis*, 21, n. 3: 266–276.
- Owen, G. E. L. (ed.) 1968. *Aristotle on Dialectic : the Topics*, Proceedings of the third Symposium Aristotelicum, Oxford: Clarendon Press.
- Ross, W. D. 1924. *Aristotle's Metaphysics*, 2vols, Oxford: University Press.
- de Pater, W. A. 1968. "La fonction du lieu et l'instrument dans les *Topiques*," in Owen (ed.), *Aristotle on Dialectic*, 164–188, Oxford: Clarendon Press.
- Primavesi, O. 1996. *Die Aristotelische Topik: Ein Interpretationsmodell und seine Erprobung am Beispiel von Topik B*, *Zetemata* 94, München: C.H.Beck.
- Slomkowski, P. 1997. *Aristotle's Topics*, *Philosophia Antiqua* 74, Leiden: Brill.
- Smith, R. 1997. *Aristotle: Topics Books I and VIII, with excerpts from related texts*, Clarendon Aristotle series, Oxford: Clarendon Press.
- 1999. "Dialectic and Method in Aristotle," in M. Sim (ed.) *From Puzzles to Principles? Essays on Aristotle's Dialectic*, 39–55, Lamham: Lexington Books.
- Wallies, M. (ed.) 1891. *Alexandri Aphrodisiensis In Aristotelis Topicorum Libros Octo Commentaria*, *Commentaria in Aristotelem Graeca (GIAG) II. 2*, Berlin: G. Reimer.
- 浅野植英 1996. 『論証のレトリック — 古代ギリシアの言論の技術』, 講談社現代新書, 講談社.
- 池田康男 (訳) 2007. 『アリストテレス『トピカ』』, 西洋古典叢書, 京都大学学術出版会.
- 山口義久 (訳) 2014. 『トポス論』, 新版アリストテレス全集3, 岩波書店.

The Dialectical Deduction and Topoi in Aristotle's *Topics*

Shogo Takahashi

In *Topics*, there are many topoi on which dialectical deduction is based. But Aristotle does not give the definition of topos in *Topics*, and the collection of topoi does not seem to be listed up systematically. In this paper, I try to show what is a role of topos in dialectical deduction, and by what standard Aristotle classifies topoi into several categories. Although, in *Topics*, Aristotle classifies topoi into four categories which are based on four predicates (i.e. definition, genus, property, accident), he thinks that there are the most common topoi in four categories, which are called “most opportune” in *Topics* VII. In *Rhetoric*, on the other hand, Aristotle distinguishes topoi into “common” and “proper” ones. Finally, to make clear the relation of these topoi, I compare the “most opportune” topoi with “common” or “proper” topoi.